

『覚禅鈔』データベースの活用

—年号・図像データベースを中心に—

Effective use of a database for the Kakuzensho

—Mainly on the era name and the iconographic Buddhist image name database—

森 由紀恵

Yukie Mori

奈良女子大学古代学学術研究センター, 奈良市北魚屋東町

Nara Women's University, Kita uoya higashi-mati, Nara City

あらまし: 日本中世成立期に編まれた真言宗小野流の教義書『覚禅鈔』は、政治史・外交史・美術史など多分野にわたる情報を含む歴史的資料として注目されている。本報告では、『大正新脩大蔵経』図像部所収『覚禅鈔』データベース(年号・図像)の作成およびその活用例について報告する。また、データベースを活用した結果、明らかになった『覚禅鈔』の歴史的的特色について示す。

Summary: The Kakuzensho was written for the establishment period in the Japanese Middle Ages. This book wrote down the creed of the Ono-ryu school, the historical facts of the political history or history of diplomacy or art history. Therefore the Kakuzensho is attracting attention to its historical document. In This paper, I report making and effective use of a database for the Kakuzensho Chapter of iconography Sects of Taisyo Sihshu Daizo-kyo Sutra(the era name, the iconographic Buddhist image name).As a result of having utilized that,I examine historic characteristic of the Kakuzennsho.

キーワード: 日本中世史, 覚禅鈔, 密教, データベース

Keywords: Japanese medieval history, the Kakuzensho, esoteric Buddhism, database

1. はじめに

日本中世史研究において、宗教は政治史の重要な要素と認識され、中世国家の実態解明のために宗教的教義を記した書物である聖教⁽¹⁾の活用が不可欠となっている。特に院政期(11世紀後半～12世紀)は、密教の教義の書面化および整理が進展する時期でもあるため、聖教を歴史資料として活用するための環境づくりが求められている。

本報告では、院政期に編纂され真言密教の尊法別百科事典と評される『覚禅鈔』を歴史的資料として活用するための試みとして作成した『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』)所収『覚禅鈔』データベースのうち、年号データベースと図像データベースについて紹介する。また、各データベースの活用方法を示すことで、デー

タベース構築の過程で明らかになった『覚禅鈔』の特色を示す。

2. 『覚禅鈔』の概要と院政

(1) 『覚禅鈔』の概要

12世紀後半に成立した『覚禅鈔』は、「百卷鈔」・「浄土院鈔」とも称され、140巻余りからなる。真言密教の尊法別百科事典ともいべき聖教⁽²⁾で、刊本としては、主に勸修寺本を底本とする『大蔵経』136巻や、増上寺本を底本とする『大日本仏教全書』144巻などがある。

著者覚禅(1143年～1213年ごろ)は、真言宗小野流の勸修寺興然や醍醐寺勝賢の付法弟子で、19歳ごろ

より約 30 年間にわたって、後に『覚禅鈔』とよばれる聖教の蒐集・執筆にあたった。

密教の修法(加持祈禱の法)別に成巻されており、その内容は、本書(具書とも 典拠となる經典名)・勤修記(実施の先例)・支度(道具類の記録)・壇図・図像(400 葉ほど)・行法(儀礼の詳細な次第)・口伝・院宣(院司などが上皇や法皇の意をうけて発行する文書)・綸旨(蔵人が天皇の命をうけて発行する文書)・御教書(三位以上の公卿または将軍の命をうけて発行する文書)・巻数(護符をかねた修法の実施報告書)・大陸の仏教書(宋代の仏教書『広清涼伝』など)からなり、日本および大陸の宗教史・政治史・美術史など多分野にわたる情報が含まれている。なお、『覚禅鈔』が『大正新脩大蔵経』のうち図像部(全 12 巻)に所収されていることからもうかがえるように、『覚禅鈔』は 12 世紀に本格化した図像集の代表例としても評価されている⁽³⁾。

『覚禅鈔』は、その重要性ゆえ、真言宗の諸寺院で書写が行われており、写本が多い。真言密教の主要寺院が集中する近畿周辺の寺院・諸機関が所蔵する勸修寺本・醍醐寺本・随心院本・東寺観智院本・高野山釈迦文院本のほか、関東や中部地方への真言密教の伝来過程の中で書写されたと考えられる金沢文庫本・千光寺本・万徳寺本・真福寺本などがある。このように多くの写本が存在するが、覚禅自筆本の可能性があるのは、真福寺本『覚禅鈔』『如法尊勝法』のみで、『覚禅鈔』成立期の姿を完全に復元することは難しく、写本間の異同が多いのも特色である。

(2)『覚禅鈔』書写の経緯と院政

日本における密教関係の聖教は、師弟間での教義の授受を記録したものや、自派の関係諸寺院で書写した内容が中心であり、『覚禅鈔』の内容も覚禅の師である興然及び興然を通じた勸修寺諸師の伝や勸修寺浄土院・高野山東別所などの寺院での書写内容が中心である。しかし、『覚禅鈔』にはこの他にも、壇所(密教の修法を行う壇を設け聖教の保管や閲覧の場所でもあった)とよばれる場で書写された記録がみられる。院政を主導した白河院や鳥羽院が造営した鳥羽殿に存

在したと「鳥羽壇所」や、院御所の「新院壇所」の他、内裏に設けられた壇所と類似の施設などでの書写の記録が確認できる。このような『覚禅鈔』書写の経緯から、『覚禅鈔』と中世成立期の政治形態である院政との関係が指摘されている。

中野玄三氏は⁽⁴⁾、中世成立期には、宗派が独立して行う修法が存在する一方、強力な院の命令によって各宗派が合同して修法を行う場合が増加していたことから、「広沢流に対抗し、小野流の高僧が院や天皇に懇請して法住寺殿・六条殿・白川殿・鳥羽離宮などの壇所にある各宗派の秘法を覚禅に閲覧させるよう努めた」とされた。また、専制政治を行った院が教義・行法そのものへ介入しはじめたことを指摘された上川通夫氏⁽⁵⁾は、壇所の分析を通じて『覚禅鈔』は院の近臣僧ともいべき小野流の寛信などの高僧や院による宝蔵・壇所の開放によって成立した「真言宗小野流必備のマニュアル」と評価されている。

以上のような『覚禅鈔』の歴史資料としての重要性およびその特質をふまえ、報告者は古写本(鎌倉期)と考えられる勸修寺本を中心に活字化された『大蔵経』所収『覚禅鈔』の年号・書名・図像のデータベース化をすすめてきた。以下、公開の目的がたった年号および図像データベースの作成とその活用例について示したい。

3. 年号データベースの作成と活用

(1)年号データベースの作成・公開

年号データベースは、年代順の索引形式で公開することとし、「年号データ」(西暦(4 桁)月(3 桁)日(2 桁)の計 9 桁の算用数字)・「項目」・「所見」・「大蔵経巻数」・「覚禅鈔巻数」・「覚禅鈔巻名」・「頁」・「段」・「備考」の 8 項目で整理し、Excel で入力した【資料 1】。データの総数は現在のところ 1578 件である。

「項目」は年号データを特定する際の基準となる年号・月・日、「所見」は『大正蔵』所収『覚禅鈔』に記載されている情報を入力した。「項目」と「所見」の多くは一致する。しかし、「所見」の情報が不十分、『覚禅鈔』の

【資料1】年号データベース（一部）

年号データ	項目	所見	大蔵經圖像巻数	巻数	巻名	頁	段	備考
111800622	元永1年6月22日	元永元年六月二十二日癸酉	第5巻	92	地鎮壇	357	3	最勝寺地鎮事 裏書七三五
111810914	元永1年閏9月14日	元永元年閏九月十四日	第5巻	130	支度	633	1	
111900514	元永2年5月14日	元永二年五月十四日	第4巻	52	准胝	913	2	裏書四五八
111900529	元永2年5月29日	元承二年	第5巻	88	孔雀經法下	313	2	裏書六九八『長秋記』元永二年五月二九日条より判断
111901228	元永2年12月28日	元永二年十二月二十八日	第5巻	132	後七日上	655	3	
111901228	元永2年12月28日	元永二年十二月二十八日	第5巻	133	後七日中	667	3	
112000000	保安	保安	第4巻	2	仏眼	406	1	息災か

書写の過程での誤記などの理由で「項目」の特定にあたって別途調査が必要な場合がある。

「所見」の情報が不十分な例として、日付が干支で記述されている、または「晦日」など記述されており、「所見」の情報から「項目」が特定できない例がある。この場合、『日本暦日便覧』⁶⁾を活用して元号・日付の算用数字を確認して「項目」を特定し、年号データ化した。また、「保安年中」など、元号の情報は記されているが、具体的な年・日付が判明しないものについては、各元号の元年のデータを入力することとした。

書写の過程の誤記の例として、『大正蔵』所収『覚禅鈔』「孔雀經法下」の例を示す【資料1】。『大正蔵』所収『覚禅鈔』「孔雀經法下」の313頁には「爰元承二年寛助僧正以孔雀尾被加持皇子御湯」とある。この場合「所見」は「元承二年」となるが、この元号は存在しない。そこで、勸修寺本『覚禅鈔』⁷⁾により文字を確認したところ、「元承二年」とあり、『大正蔵』に活字化する際の誤記ではないことが判明した。次に、寛助僧正が孔雀の尾を用いて皇子の湯殿加持に関わった史料を確認したところ、『長秋記』元永二年五月二九日条に皇子(後の崇徳天皇)誕生の翌日の御湯殿の儀にあたり、夜前より孔雀經法を修していた寛助僧正が孔雀尾などを御湯殿に持参したこと、御湯殿にて加持を行ったことが確認できた。このため、「元承二年」は「元永二年」の誤りである可能性が高いことが判明した。そこで、「項

目」は「元永2年5月29日」、「所見」は「元承二年」とし、「備考」に『長秋記』元永二年五月二九日条より判断と注記した【資料1】。このように「備考」には、奥書・裏書などの情報の他、「項目」特定の根拠となった史料名なども入力した。

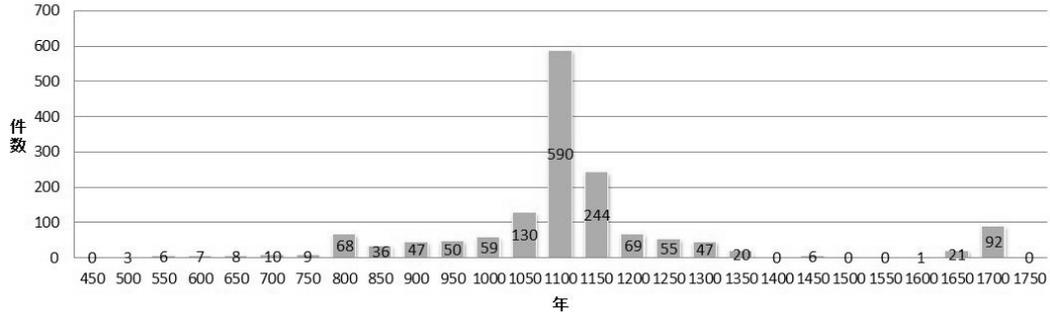
以上のように情報の整理・確定を行った年号データベースによって、『覚禅鈔』の年号データの新情報を提供することが可能となる他、巻別に分析がすすめられる傾向のある『覚禅鈔』に、年号データという新しい切り口を設定することで、巻の特色にとらわれず『覚禅鈔』全体の特色が把握できる可能性がある。以下、年号データの活用の一例を示していきたい。

(2)年号データの活用

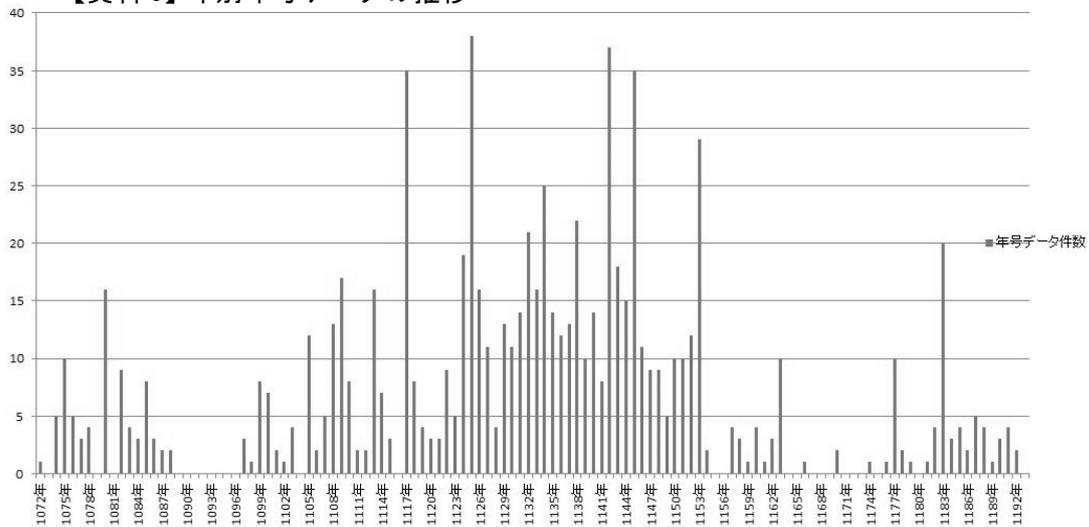
『覚禅鈔』の年号情報は、縁起・勤修記・巻数・支度・文書(院宣・請文など)のほか、書写の経緯を示す奥書などで確認できる。これらの年号データの件数を半世紀ごとにカウントしたものが【資料2】『大正蔵』所収『覚禅鈔』年号データの推移である。

【資料2】によると、『大正蔵』所収『覚禅鈔』には6世紀から18世紀にいたるまでの年号情報が含まれている。このうち、12世紀後半から奥書情報が入りはじめ(12世紀後半は総数244件中77件、13世紀前半は総数69件中64件が奥書情報)13世紀後半以降は全て奥書情報となる。

【資料2】『大正蔵』所収『覚禅鈔』年号データの推移



【資料3】年別年号データの推移



『覚禅鈔』本文の特色を考察するにあたって、奥書情報を除外した上で年号データの推移を分析すると、6～8世紀には10件に満たなかった年号情報が、9世紀に入って40件前後から60件ほどとなり、院政の開始される11世紀後半には130件、12世紀前半には590件と激増する。その直後12世紀後半は奥書情報を除くと167件と7割近くも減少し、13世紀には5件となる。このデータの推移は、12世紀が口伝の文献化などにより聖教の書写が増大する時期であること⁽⁸⁾と合致する。

次に、白河天皇が即位した1072年から後白河が没する1192年までの年別の年号データの推移を示した

【資料3】年別年号データの推移によれば、年号データが年に20件以上となるのは、白河院政期の後半にあたる1117年からで、鳥羽院政期には1125・1132・

1134・1138・1142・1145・1153年の計7年で確認でき、後白河院政期では1183年の1年のみである。白河院政期の後半から鳥羽院政期の中に『覚禅鈔』の年号データが集中している状況がわかる。

このような傾向を分析するために、【資料4】に白河・鳥羽・後白河期の巻別年号データ件数を算出した表を示す。

鳥羽院政期は、第131巻巻数および第130巻支度の割合が全体の40%をしめているのが特色といえる。巻数は修法の実施報告書であり、支度は修法に必要な道具の書き上げであるため、この2巻が『覚禅鈔』の年号データが集中する鳥羽院政期の主要な構成要素であるということは、『覚禅鈔』は鳥羽院政期を中心に勤修された修法の実施例を主要な構成要素としていることを示している。そして、『覚禅鈔』の巻数を分析された

【資料 4】 巻別年号データ件数

〈白河〉 ※10 件未満の巻

『覚禅鈔』 巻名	132 133 134 後七日	19 20 21 請雨法	131 巻数	89 太元法上	70 延命	15 如法尊勝	130 支度	75 76 普賢延命	129 宝珠	他※	合計
年号データ 件数	97	37	32	17	16	16	15	11	11	102	354

〈鳥羽〉

『覚禅鈔』 巻名	131 巻数	130 支度	132 133 134 後七日	15 如法尊勝	80 81 愛染	26 27 仁王經	13 14 尊勝	他※	合計
年号データ 件数	88	65	57	21	12	11	11	117	382

〈後白河〉

『覚禅鈔』 巻名	93 94 95 大威徳	83 転法輪	他※	合計
年号データ 件数	16	14	26	56

上島享氏⁹⁾が提示された「『覚禅鈔』所収巻数一覧」によれば、第 131 巻に収録されている巻数のうち、鳥羽院政期の巻数は寛信の署名があるものが 67%をしめる(42 点中 28 点で約 67%)。

以上の分析より、年号データより明らかになる『覚禅鈔』の特色としては、白河院政期後半から鳥羽院政期に実施された修法の実施例が主要な構成要素であり、その情報は小野流の一門流である勅修寺流の祖とされ白河院や鳥羽院の近臣僧と評価されている寛信¹⁰⁾によるものが中心であることが指摘できる。『覚禅鈔』には寛信の口伝が多いことはすでに指摘されている¹¹⁾が、【資料 3】のデータ推移からは、年号データ上でもこの状況を確認することができる。また、年号データが 20 件をこす年が白河院政期の後半より現れ、鳥羽院政期に増加する傾向は、白河院政が専制化する 1107 年以降に行われた院による密教興隆政策及び鳥羽院政期における院周辺での聖教等の編纂を中心とした白河院期の整理・統合の傾向¹²⁾を背景とすると考えられ、『覚禅鈔』と院政との関係をデータによっても裏付けることができたといえる。

4. 画像データベースの作成と活用

(1) 画像データベースの作成・公開

画像データベースは、「所見」・「画像 No.」・「大蔵経巻数」・「覚禅鈔巻数」・「覚禅鈔巻名」・「頁」・「段」の 6 項目で整理し、以上の情報を Excel で入力した。現在のところデータ総数は約 800 件である。データは、『大正蔵』所収『覚禅鈔』で画像 No. が付されている諸仏だけでなく、壇図や字輪観・三昧耶形(諸仏の発した誓願を具象化した器仗など)など『覚禅鈔』本文中に描かれる図も対象とした。また、画像は写本間の異同が確認しやすいことをふまえ、上述の画像データベースに、他の写本に比べ独自記事を多く含む事で知られる千光寺本¹³⁾の「巻名」・「紙数」・「所見」・「備考」を追加入力した。「備考」には彩色の有無・裏書などの情報に加え『大正蔵』所収『覚禅鈔』との相違点などを記入した。

このように作成した Excel データへの画像データの取り込み方が課題として残っていたが、2016 年 6 月に『覚禅鈔』が収録されている『大正新脩大蔵経画像部』の画像データベース¹⁴⁾(以後 SAT 大正蔵画像 DB)が公開されたため、現在関連づけを検討中である。

(2) 画像データベースの活用

現在、SAT 大正蔵画像 DB では『大正蔵画像部』が IIF に準拠して公開されている。また、第 1 巻と第 2 巻の諸尊について、面数・臂数・持物・印相・装身具などから検索することが可能となっている。『覚禅鈔』は『大正蔵画像部』の第 4・5 巻に収録されているため、現在この検索機能を活用することはできないが、SAT 大正蔵画像 DB で公開されている画像と今回作成した画像データベースの活用例について示したい。

SAT 大正蔵 DB で公開されている画像は、モバイル端末などで拡大も可能で細部まで鮮明に確認することができる。これにより、『覚禅鈔』諸本の画像調査の際、『大正蔵』所収『覚禅鈔』の画像との比較が可能になる。本来、所蔵の異なる諸本を並べて比較することは困難であるが、SAT 大正蔵 DB を活用することによって、それが可能となるのである。その際、画像データベースに「画像」の項目を設定した上で、SAT 大正蔵 DB と図

に「画像」の項目を設定した上で、SAT 大正蔵 DB と画像データベースを関連づけておくことによって、調査が迅速にすすめられると考える。

5. おわりに

以上、『覚禅鈔』の年号・画像データベースについて、その作成・公開方法と活用例について確認した。

年号データベースについては、作成の過程の調査によって新規の年号情報を提供することが可能になった。特に3. で例示した御湯殿加持の例は、『大日本史料』に収録もされておらず、その出生が政治上注目される崇徳天皇の誕生に関連する記事であること、法の関白と称された寛助による孔雀経法に関する記事であることから、政治上注目される。年号データベースは『覚禅鈔』を歴史的資料として活用するために有益であるといえる。

また、年号データベースをもとに作成したグラフを通じて、『覚禅鈔』の歴史的特色を示し、従来巻別に分析されていた『覚禅鈔』の歴史的特色は、年号データからも特定できることを確認した。今後は巻別の年号データの分析など、年号データベースのさらに活用していきたい。

画像データベースでは、SAT 大正蔵画像 DB との関連づけが課題となる。当面は、『覚禅鈔』諸本の異同を確認するという趣旨のもと、画像データベースに SAT 大正蔵画像 DB の画像を関連づける方法を検討していきたい。また、SAT 大正蔵画像 DB での検索機能との関連づけを意識し、画像データベースの項目を追加して、面数・臂数・持物・印相・装身具などの情報を入力することなども検討していきたい。

付記：本研究は平成26年度～平成28年度科学研究費補助金(基盤研究(C))、研究代表者：森、課題番号：26370766 の成果の一部である。

注

(1) 聖教とは、寺院社会内で作成された教義・行法に関する記録で、僧尼の修学や宗教活動の実践に

際して活用された。聖教は師弟間で原本授受や書写伝受が行われ、法脈継承の根拠ともなった(上川通夫「中世聖教史料論の試み」『日本中世仏教史料論』吉川弘文館 2008年 初出は『史林』79-3号 1996年)。

- (2) 以下、『覚禅鈔』の概要については、中野玄三「覚禅伝の諸問題」『仏教芸術』70号 1969年、上川通夫「密教文献と中世史—『覚禅鈔』をめぐって」『日本中世仏教と東アジア世界』塙書房 2012年(初出『歴史科学』186 2006年)によった。
- (3) 佐和隆研「密教における白描画像の歴史」『仏教芸術』70号 1969年。
- (4) 中野前掲論文。
- (5) 上川通夫「院政と真言密教」『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社 1998年。
- (6) 湯浅吉美編 汲古書院 1988年。
- (7) 『覚禅鈔』十 勸修寺善本影印集成 10 親王院堯榮文庫 2002年。
- (8) 上川「院政と真言密教」前掲書。
- (9) 上島享「密教修法の構成と歴史の変遷に関する基礎的考察—『覚禅鈔』所収の巻数を中心に—」覚禅鈔研究会編『覚禅鈔の研究』親王院堯榮文庫 2004年。
- (10) 上川通夫「中世寺院社会の構造と国家」『日本中世仏教形成史論』校倉書房 2007年(原題は「中世寺院の構造と国家」『日本史研究』344 1991年)。
- (11) 中野前掲書。
- (12) 上川「院政と真言密教」前掲書。
- (13) 千光寺本については、井上佳美「資料紹介 千光寺本『覚禅鈔』についての一考察」(『愛知県史研究』13号 2009年)に詳しい。
- (14) SAT 大正蔵画像 DB の HP は <http://dzkings.l.u-tokyo.ac.jp/SATi/images.php>。